作家・村上春樹さんと士別とのかかわりについて〔その1〕

村上さんは士別に2度来ていた

このほど発刊された新潮社の「村上さんのところ」【コンプリート版】(電子書籍)には、読者の質問に答えるかっこうで、作家の村上春樹さんが羊の取材とシドニー・オリンピックのエッセイ取材で士別市を訪れていることがはっきりしました。本紙ではこの新事実をもとに、村上さんが「なぜ士別市に注目しているのか」、作品「羊をめぐる冒険」の舞台となる「十二滝町」とはどのようなものであるのかを検証してみることにしました。4回にわたって連載します。著名な作家が士別とどのように関わってきたのか、掘り下げていきたいと思います。

村上さんが「羊をめぐる冒険」(講談社)とエッセイ集「シドニー!」(文春文庫)の取材のために2度、士別を訪れていることについては、村上さん自身が「(士別に)2度目に行ったのは2000年」と書いているので、これはもう動かしがたい事実です。

詳しくは道北日報の本年7月29日付に掲載されています。まだお読みになっていない方で、関心のある方はこの記事を参考にしてみてください。

今のところ、村上さんの著作の中で、「士別」の地名が入っているのが4作あります。

ではなぜ「士別」なのか、ということになるわけですが、その前にまずは、あの大ベストラー作品「ノルウェイの森」(講談社)から、この疑問に迫ってみたいと思います。

―旭川市と士別市に注目

「ノルウェイの森」を開く前に、予備知識として村上春樹さんが、「士別」に注目していると言える理由の根拠はどこにあるのかを示しておきたいと思います。

それは彼自身が「ひとつ村上さんでやってみるか 490の質問」(朝日新聞社)」の中で、帯広の読者に答えるかたちで、士別市を取り上げているからです。

彼は回答の中で「これまで僕は北海道の中で旭川市と士別市にもっぱら注目していたんですが」と答えています。

士別市には「羊をめぐる冒険」で取材に来ているわけですから、士別への注目度に関してはさして違和感はないのですが、ではなぜ、ここで唐突に「旭川市」が出てくるのでしょうか。

この疑問に答えるのを待っていたかのように登場するのが、「ノルウェイの森」です。

その前に「士別」の地名が出ている4作と「ノルウェイの森」について、時系列に配してみます。

「羊をめぐる冒険」から「ノルウェイの森」までの間は5年間。村上さんが士別を訪れてまだ記憶に新しいままです。

この期間と、以下3冊の士別への言及とともに、「ノルウェイの森」を通して「旭川」と「士別」を考えてみます。村上さんにとっての旭川は十二滝町の手前に存在し、十二滝町からはおそらく南側か南西側の方角に位置します。関係がないわけではないのです。

では以下、発刊順です。

●「羊をめぐる冒険」(発刊1982年10月)

●「ノルウェイの森」(1987年9月10日)

●「シドニー! コアラ純情編」(2004年7月10日)

●「ひとつ村上さんでやってみるか」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける490の質問」(2006年11月30日発行)

●「村上さんのところ コンプリート(完全)版」(電子書籍版2015年7月24日)

次回は以上の5作から、「ノルウェイの森」を起点にして、村上春樹さんの士別関連の足跡をたどっていきたいと思います。

〔本文=本紙・北村浩史

なお、この内容は北村が自身のフェイスブックに連載したものを、若干、修正加筆したものです〕

「村上さんのところ」の電子書籍版です。新潮社のホームページからダウンロード(購入)して、閲覧します。コンプリート版というのは完全版です。印刷による書籍版もありますが、こちらは回答件数が極端に少なくなります。士別市の回答は単行本書籍版には掲載されていません。

作家・村上春樹さんと士別とのかかわりについて〔その2〕

「ノルウェイの森」と旭川と士別

「ノルウェイの森」に言及する前に、まず「羊をめぐる冒険」を書くために、村上さんが士別市の取材にいつ頃訪れたのかを探ってみます。

村上春樹全作品（1979―1989・講談社）の中の第2巻のために書かれた村上さん自身のエッセイ『自作を語る』新しい出発」（1990年7月20日発行）から推察すると、彼は羊の生態や歴史を調べるために「秋に北海道に取材に行き（略）東京に戻って最初の部分をぼちぼち書いているうちに」と書き、さらに「士別というところの牧場に行って、羊の飼育を研究されている先生にいろいろと話を伺ったりした」と士別市を訪れたことを明らかにしました。彼が士別市に足跡を残したのは1981年の秋のはじめと考えていいと思います。

さて「羊をめぐる冒険」の第8章Ⅲに、主人公の「僕」は列車に乗って札幌から旭川を目指します。旭川からは乗り継いで塩狩峠を越えます。小説はこの旭川を起点に北の世界が羊ワールドとなっていくことになります。

では「羊をめぐる冒険」の5年後の1987年に発表した「ノルウェイの森」における「旭川」はどのような存在なのでしょうか。

旭川は実にこの小説の終幕に登場する場所となりました。レイコさん（直子さん＝主人公ワタナベ君の恋人＝の担当医）がワタナベ君に告げる行き先が、なんと旭川。しかもワタナベ君はレイコさんに（旭川に）一度行ったことがあると教えます。

この旭川への印象について、レイコさんは「なんだか作りそこねた落とし穴みたいじゃない？」とか「でも人は旭川で恋なんてするものかしら？」と疑問を発します。彼女に散々な言われ方をされますが、ワタナベ君は旭川の街を訪れていた経験から、その印象について「良い街です」と反論します。

旭川でのこの落とし穴は「ノルウェイの森」の直子さんの野井戸の話に比べれば悲壮感のない穴を連想させるものです。さらに旭川は、どのような真理も愛するものを亡くした哀しみを癒すことができないと考えているワタナベ君やレイコさんに恋を忘れられる、苦しみから逃れられそうな存在に見えます。

どうでしょうか。村上春樹さんが「ノルウェイの森」発刊後19年も経ている2006年発行の「世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける490の質問」（朝日新聞社）＝写真＝で、「北海道では旭川市と士別市にもっぱら注目している」と答えた理由が、これでなんとなく見えてきたような気がします。

羊の取材で訪れた「士別」、「羊をめぐる冒険」での起点となり「ノルウェイの森」にも登場させた「旭川」、線で結ばれているこの2つのまちが年月を経ても村上さんの脳裏に焼き付いていたことは、間違いないといってよいと思います。

とはいえ「ノルウェイの森」に登場する旭川の印象は、あくまでも創作というフィクションの世界です。その印象をすべての読者が共有できるものではありません。

村上さんは旭川で乗り継いだ時に、そこでいったい何を見たのでしょうか。何に注目していたのでしょうか。実のところ、旭川については、糸口がありません。

けれども士別についての「注目」は「ノルウェイの森」発表後の7年後のシドニー・オリンピックで、さらに鮮明になっていきます。

次回は、これについて考えてみます。

〔本文＝本紙・北村浩史
なお、この内容は北村が自身のフェイスブックに連載したものを、若干、修正加筆したものです〕

「注目しているのは旭川市と士別市」と答えている「ひとつ、村上さんでやってみるか」。この読者との対話における村上さんの積極的な姿勢は、「村上さんのところ」でも引き継がれていきます。

作家・村上春樹さんと士別とのかかわりについて〔その3〕

村上さんとシドニー・オリンピックと士別

最初に結論めいたことを書きますが、村上春樹さんにとって「士別」は、たまたま旅行者として立ち寄った観光地のような通過点ではなく、あくまでも明確な目的意識を持った存在であったということです。今回のシドニーオリンピックへの言及は、この理由をさらに補強していくものです。

村上さんとシドニーと士別、どんなつながりがあるの？と意外に思える人も多いでしょうが、それほど複雑な関係ではありません。ただしこの3者の関連が村上さんが士別市を注目する2点目の内容となっていきます。

ここでも村上さんのエッセイ『自作を語る』新しい出発」（前出）が、「士別市を注目」する理由の拠り所となっていきます。それは村上さんが「走る人」になったからです。合宿の里士別には「走る人」がたくさんやってきます。

村上さんはこのエッセイで、32歳の時に専業作家の生活に入り「夜はきちんと10時に寝て、朝は6時に起きるようになった。その頃から毎朝ランニングをするようになり、翌年にはフル・マラソンを走るまでになった」と書いています。その後、「走ること」は村上さんの大きなテーマになっていきます。

やがては村上さんのこのフルマラソンやトライアスロンへのこだわりが、エッセイなどにも結実していきます。

―士別は施設が揃い感心

その彼がなんと、士別市に2000年に合宿に来ていた日本のトライアスロン・チームの取材で訪れていたことが、はっきりとしました。

このことは「村上さんのところ　コンプリート（完全）版」（新潮社・電子書籍版2015年7月24日）に「（士別市に）二度目に行ったのは2000年のことです。『シドニー！』を書いたとき、オリンピックの直前に、そこで合宿していたトライアスロン・チームの取材に行ったのです。（士別市は）素晴らしいスポーツ施設が揃っていて、感心しました」と、士別市の施設の充実ぶりに感心しています。合宿の里士別ならではの感想かもしれません。

さらに「シドニー！　コアラ純情編」（2004年7月10日）のエッセイでは9月18日付で、戦いを終えたトライアスロンの西内選手の取材の中で「6月の北海道士別の練習でもかなりがんがん飛ばしていたけど、あれから更に上げていったんだ」（P163）と書き、村上さんの士別来訪を裏付けています。

村上さん自身、羊の取材に訪れた士別を、今度は羊とはまったく縁のないトライアスロンがきっかけで、再び訪れることになるとは、予想だにしていなかったことだと思います。

2000年といえば、士別ではハーフマラソンが始まっています。この時すでにこの大会には「サフォークランド」の冠がついていました。村上さんが知っていたかどうか気になるところです。

では今までのおさらいです。時系列です。（）内は発行年月日です。

●「羊をめぐる冒険」（1982年10月）＝村上春樹全作品（1979―1989・講談社）の中の第2巻のために書かれた村上さん自身のエッセイ『自作を語る』新しい出発」（1990年7月20日発行）に1981年秋頃、羊について士別を訪れ取材したことを書く。

●「ノルウェイの森」（1987年9月）＝主人公の「ワタナベ君」が一度訪れたことのある街・旭川。最終章、レイコさんが最後に行き着く所。

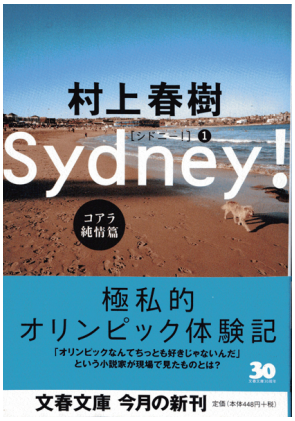
●「シドニー！　コアラ純情編」（2004年7月10日）＝トライアスロンの取材で士別を来訪。

●「ひとつ、村上さんでやってみるか」と世間の人々が村上春樹にとりあえずぶっつける490の質問」（2006年）＝村上さんは「士別と旭川を注目している」と書く。

冒頭に書いた結論の「士別に訪れた理由」には明確な理由があったことが、これではっきりしてきたのではと思います。

さて次回からは、「羊をめぐる冒険」の十二滝町について触れたいと思います。村上春樹さん自身は「十二滝町のモデルは○○です」と言ってるわけではないので、今までは私自身はあまり関心はなかったのですが、調べてみるとけっこう興味深くなっていきました。具体的に自分なりにその印象を書き加えていきたいと思います。

〔本文＝本紙・北村浩史
なお、この内容は北村が自身のフェイスブックに連載したものを、若干、修正加筆したものです〕



シドニー・オリンピックに関してまとめたエッセイ。トライアスロンについては、多くのページを費やしており、村上さんにとってはかなり関心の高いスポーツとなっている。

作家・村上春樹さんと士別とのかかわりについて〔その4〕

「十二滝町」と開拓前史①

―まずはあいまいな存在の町のキーワードから

誰もが問いただしたい質問の「羊をめぐる冒険」に登場する「十二滝町」ってどこにあるんですか？　ともし突きつけられたなら、「あの町は架空のまちです」と答えるのが穏当ですし、作家にも失礼に当たらないと思います。

場所を実在の町に特定してしまうと、想像力が萎えてしまい、町そのものがつまらなくなってしまいます。そのようなことを作者が望むはずがありません。

場所特定に関してのあまりのあっさりな回答に失望する人がいるかもしれませんが、その理由については作品に登場する「十二滝町の町史」を紐解けば、すぐにでも明らかになることです。

村上さんがもし「十二滝町のモデルは道北の○○です」と言ったならその矢先に、彼は「十二滝町の町史」の訂正を迫られ、改訂版を出さざるを得なくなるはずだからです。

作家は架空のまちづくりが大好きです。たとえば村上春樹さんがよく読んでいたノーベル賞作家の米国のフォークナー。彼には架空の土地ヨクナパトーファ郡ジェファソンを舞台にした「ヨクナパトーファ・サーガ（叙事詩）」があります。サーガといえば、ファンタジー小説のファンなら、いくつかの作品を思い浮かべることができるかもしれません。

私も最初、村上さんの「旭川市や士別市に注目する」の文章を目にし、十二滝町の成り立ちを読んだ時に、ひょっとして村上さんは道北のこの地を将来、壮大で神話的なサーガの世界としてつくり上げていくのではないかと、勝手に思いこんでワクワクしていました。

でもこれは作家が作品にしてからの話です。今はとりあえず捨てておくしかない思いこみだと割り切って、十二滝町に踏み込んでみました。

この架空のまち十二滝町を探るにはいくつかのキーワードがあります。

・明治13年
・イナゴ襲来
・ボーダーコリー
・サフォークの牧場
・塩狩峠
・大規模稲作北限地
・駅前　レンガの倉庫群
ロータリー　小さなデパート
駅前
・旧国鉄廃止ローカル線
・木材加工　出荷は名寄か旭川に
・滝
・札幌から260キロ

などなどです。この他にもあるかもしれませんが、とりあえず思いついた分です。

上から5つめまでは具体的な内容なので、検証可能ですが、その下の項目についてはあいまいな内容です。

まずはそのあいまいな部分から十二滝町の所在を探ってみたいと思います。

たとえば士別関連ならかつては駅前に「大規模稲作北限地」のような看板があったように思える人もいるでしょう。でも北限は時に風連であったり美深でもあったりしています。

あるいは「駅前　レンガの倉庫群　ロータリー　小さなデパート」なんて、士別市なんかも実際に倉庫群やロータリーがありますが、北海道ではありふれた光景なので、特定しずらく、なんとなくわがまちに似ていると思う程度です。

主要道による都市間距離をみると「札幌から260キロ」といえば、滝上町あたりです。220キロ強だと美深町あたりです。両町ともに旧国鉄ローカル線が廃線となっています。この距離感はあまりあてになりません。林業と木材加工を産業にし、木材を「町を素通りして名寄か旭川に出荷」となれば、両町に該当します。

などなどこれらはこれまでにも指摘されてきたことであり、実際には場所を特定することはかなり難しいものです。

なにより村上春樹さんが「モデルはここです」と言わない限り、あいまいなままですし、「十二滝町」は架空のままです。というより村上さん自身、「十二滝町の町史」の改訂版を出すつもりなんかはないはずですから、十二滝町は永遠にモデルのはっきりしない架空の町です。

この架空のまちを前提に、次回の②では「十二滝町の町史」の開拓前史に直接、光をあてることで、「十二滝町」の迷宮に分け入ってみたいと思います。

※追記＝連載その③のシドニー・オリンピック関連で、士別市教育委員会様がシドニーオリンピック・トライアスロンの日本代表監督を務めた飯島健二郎氏に、村上春樹さんの取材の件を確認したところ、実際に飯島監督、西内選手らの4人と士別市内の飲食店で1時間ほど、村上さんの取材に応じたとのことでした。

〔本文＝本紙・北村浩史
なお、この内容は北村が自身のフェイスブックに連載したものを、若干、修正加筆したものです〕

北海道ではそれほど珍しくもないレンガの倉庫群。士別でも駅から南の鉄路に沿って建っています＝写真＝。十二滝町の駅前にもこのような倉庫群があります。

作家・村上春樹さんと士別とのかかわりについて〔その4〕

「十二滝町」と開拓前史②

―この地方ではあり得ない明治13年と蝗の大襲来

では具体的な項目ではどうでしょうか。

ひとつめは「明治13年」ですが、「十二滝町の歴史」によると、最初の開拓民18人が入り込んだのは「明治13年の夏」とあります。

アイヌの人たちを道案内に札幌から石狩川を北上し、旭川に辿り着くと、今度は「塩狩峠」を越えて北上し、2日後に進路を東にかえて、札幌から260キロの地点に共同小屋を建てました。

もうひとつは「蝗」(イナゴ)です。彼らは開拓地を切り開くと早々に、蝗大襲来の被害に遭遇します。

郷土史家ならずとも、道北の人々は誰もが「おや?」と思います。

明治13年に和人が塩狩峠を越えて開拓に入ることは可能なのか。しかも規模の大きな耕作地もないのに蝗の襲来などありえるのか。

さらに明治21年に道庁の役人が開拓民全員の戸籍を作りたいとやってくるのです。

当時のこの地方の未開発の状況を鑑みれば、これはもう不可能に近いものです。このことは旭川、道北の自治体の郷土史をひもとけば一目瞭然です。

実際、私もいくつかの郷土史に当たってみましたが、その頃、この地に入るには天塩川を丸木舟で南上するしかありませんでした。

しかも明治18年になっても旭川近辺までお役人が決死の覚悟で石狩川を丸木舟でやってくる時代です。塩狩峠を越えての戸籍調査など先の先の話です。

郷土史に詳しい人の話によると、その当時、アイヌの人々なら旭川から愛別方面を抜けて道東、道北に抜けるルート往来はあっただろうが、そのアイヌの人々も含め、民間人にとっても神居古潭から塩狩峠を越えて士別や名寄への到達は情報のない人跡未踏ルートで、鬱蒼とした原始林の中、地図のない闇の世界をまさぐるようなもの。ありえないし、そんな史実は皆無とのことでした。

さらに蝗の大襲来です。明治13年といえば、この地は原生林。川縁のわずかに広がる平地に小家族によるアイヌの人たちが住んでいるだけです。蝗の大量発生を誘発するような草原、広大な農地、ましては農作物への被害などは存在しえません。

これでは、この地が明治13年に限れば、十二滝町である可能性は低くなる一方です。

では村上さんの明治13年は作り話の歴史に合わない史実なのでしょうか。どうやらそうでもないようです。実は当時、「十二滝町の歴史」に酷似している地域が道内にありました。

―十二滝町は十勝がモデル?

たとえばネットで「北海道、蝗大発生」と検索すれば、ウィキペディアなどで明治13年8月から明治17年にかけて十勝地方で大発生したことを容易に見つけることができます。帯広市のホームページにも開拓史の中に盛り込まれています。

この蝗被害は日高山脈を越え、札幌や空知、後志地方へと広がりましたが、あいにく道北にまで及んだという形跡は史実に残っていません。

しかもこの当時、帯広では多くのアイヌの人々が住み、和人が沿岸部から内部へと入り込み始め、開拓の曙光が見え出しました。開拓前史に限れば、村上春樹さんの「十二滝町の歴史」は、この十勝地方を参考にしているように思えてなりません。他には該当するところがないからです。

まさかそこが「十二滝町」? そんなことはありません。大丈夫です。そこに行くには塩狩峠を越える必要はありませんので、十二滝町はこれから先も道北のどこかに架空のままに存在し続けられます。

物語には登場人物たちが逆境を克服していく劇的要素は欠かせないものです。村上さんは明治13年から20余年の道北における和人開拓の歴史的空白を埋めるために、十勝地方の蝗大襲来の苦難を町史に充当して、開拓史をより緊迫したものに仕上げたのではないでしょうか。

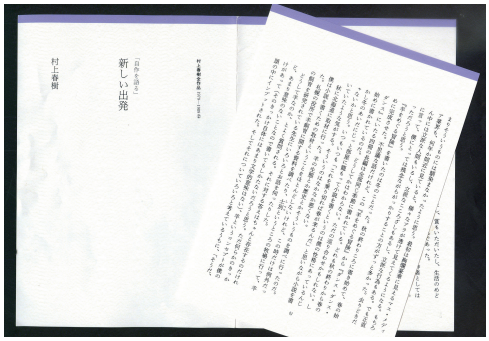
「羊をめぐる冒険」はフィクションです。作家としてはこの手法は一般的なもので、「史実と違う」などと騒ぎ出すものでもありません。

迷宮とてキーワードという指針があれば、入り口が見えてきます。十二滝町は「明治13年」、「蝗」、この2つの言葉によって、いくつかの地域を重層的に組み上げた「作家が創りあげた(魅力的な)架空のまち」であることを教えてくれています。

次回(最終回)は十二滝町に登場する「羊」について考えます。

〔本文=本紙・北村浩史

なお、この内容は北村が自身のフェイスブックに連載したものを、若干、修正加筆したものです〕



トライアスロンへの関心や士別への注目を探る糸口となった「村上春樹全作品(1979―1989 講談社)第2巻のために書かれた村上さんのエッセイ『自作を語る』新しい出発」(1990年7月日発行)。士別を訪れたことが書かれている。

作家・村上春樹さんと士別とのかかわりについて〔その4〕

「十二滝町」と開拓前史③

―羊の飼育は、開拓初期のこの地方では記録なし

最後になりますが、ここから少し「羊」と「十二滝町」の関係に踏み込んでみます。

「羊をめぐる冒険」には十二滝町がまだ村の時代の明治35年に「村営の緬羊牧場」が作られたという話が登場します。しかも「道庁から役人がやってきて、柵の作り方や水の引き方、牧場の建築を指導した」とあります。

そんな村にやってきた羊は、サウスダウン36頭とシュロプシャー21頭です。さらに牧羊犬のボーダー・コリー2匹の提供も受けています。

士別市の農業アドバイザーとしてサフォークの飼育指導に当たった平山秀介氏（道立滝川畜産試験場）の「わが国におけるめん羊飼育の現状と問題点」によると、明治9年に札幌農学校にめん羊牧場が作られていますが、その後の飼養は芳しくなく、明治32年には消滅しました。明治41年には農商務省の月寒種畜牧場でめん羊飼育が開始され、こちらは良好な繁殖成績を示したとあります。

確かに札幌ではめん羊飼育があったのは事実ですし、帯広では晩成社という開拓移民団による羊の飼育が行われたことがありました。

十二滝町の緬羊牧場の話は、こういった開拓先進地の話を参考にしたものではないでしょうか。緬羊牧場は開拓初期の道北地方には縁遠い話ですし、ボーダー・コリー（牧羊犬）については他のめん羊飼育の歴史を探っても見出すことができませんでした。明治時代には早くも洋犬の輸入が行われていますが、こちらにもボーダー・コリーを見つけることができませんでした。

平山氏によると、サフォーク種が本格的に北海道に入ってきたのは1960年後半です。自治体では士別市が1967年に道内ではトップを切って100頭導入しました。個別農家では十勝や北見地方の畑作農家が中心でした。

1960年～70年代にかけてのサフォーク飼育は上川地方に限れば、士別市と羽幌町が主たる生産地です。平山氏は「天北地方の酪農家の間では、まだ積極的なめん羊の動きはない」と指摘しており、個別飼育については、残念ながら実態ははっきりしていません。

「明治13年」、「蝗（いなご）」、「明治35年の緬羊牧場」、ここまでくると、「十二滝町」はいっそう前段と同様に、帯広（十勝）の開拓史との間に近似性を感じさせるものです。

―十二滝町の羊の様子は、リアル感たっぷり

ではそんな昔から一気に1978年に飛び、十二滝町にある「サフォーク」の牧場を訪れてみます。

ここまで近くなってくると、「十二滝町」の世界は、士別も含めて、この地方と印象が重なるリアル感が漂ってきます。羊を知ろうと士別市に取材に訪れ、羊の放牧姿に見とれていたという作家・村上春樹さんの足跡を充分に感じさせてくれるものです。

牧場には200頭の羊が飼育されていること、食用にまちの飲食店や旅館に売られていること、羊舎の内部の様子や犬小屋とボーダー・コリーの存在、僕（主人公）が羊舎に入ると、いっせいに僕の方を見る羊の様子。そして僕は「サフォークはどこかしら奇妙な雰囲気のある羊だ」と思う。そんな羊の挙動を、作家は感性豊かに描き出していますが、これはもう作家お得意の想像力というより、羊を直接前にした取材と観察のなせるワザのように思えてなりません。

ここに至って「十二滝町」とはどのようなまちであったのかが、ようやっと見えてきました。

場所は塩狩峠を越えた道北のどこからしく、その開拓史は十勝地方の村落に似ており、舞台となる空間はかなりの数のサフォーク羊のいるところ、「十二滝町」はその複合による「架空のまち」なのです。

読者が作家や作品への傾斜を深め、共関係の強度を高めていくことで、そのまちが自分の中で内実を帯びてきます。そして私たちひとりひとりに「私だけの、あるいは私にとっての十二滝町」が誕生してくるのではないでしょうか。

「羊をめぐる冒険」の旅はこれで終わりですが、さてどうだったでしょうか。

村上春樹さんが**「なぜ士別に注目したのか」、「十二滝町はどのように出来上がっていったのか」**、思いつくままに検証してみましたが、幾ばくかはその疑問に迫ることができたのではないかと思います。

もちろんこの試みがすべて正解だと断定できるわけではなく、新たな疑問や「いや、こうではないのか」との反証があるかもしれません。

その時はその時でおおいに盛り上がれば作者の思う壺です。その壺の奥底には何が潜んでいるのか、のぞきこんでは新たな発見に胸躍らせる。これもまた村上春樹さんの仕掛けたトラップにはまる楽しみのひとつではないでしょうか。（終）

〔本文＝本紙・北村浩史

なお、この内容は北村が自身のフェイスブックに 連載したものを、若干、修正加筆したものです〕

羊と雲の丘の羊たち。村上春樹さんは士別のめん羊牧場を訪れ、サフォークの取材を行い、いつまでも草を食むサフォークを眺め続けていたという。